

広重の版画と江漢作らしい油絵、二つの「東海道五十三次」について

About Two Picture Series of The Tokaido 53 Stations,
One Wood Prints by Hiroshige and The Other Oil Paintings
by Presumed Kokan

荒木啓介（科学技術振興事業団、工博）

ARAKI, KEISUKE

東京都千代田区四番町 5 - 3

Japan Science and Technology Corporation

5-3, Yonbancho Chiyoda-ku, Tokyo 102-8666 JAPAN

大島洋一（資料提供、東海道研究者）

OHATA, YOICHI(Tokaido Researcher)

横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘 1-10-13

1-10-13, Sakuragaoka, Hodogaya-ku, Yokohama-City JAPAN

【抄録】歌川広重の世界的に有名な版画「東海道五十三次」は美術愛好家のみでなく、理科系の研究材料にも採り上げられているが、多くの謎も指摘されていた。最近構図や人物描写までよく類似している、司馬江漢の落款がある55枚の油絵が見つかったが、美術界は広重を真似た後世の贋作としている。その指摘点を再検討し構図を詳細に分析すると、多くの証拠から江漢の絵が広重版画の元絵であることは否定できず、この逆は不可能と分る。この前提に基づけば、広重画で従来から謎とされていた部分が解明できることを示す。

【Abstract】 The Tokaido 53 Station Series, one of the world famous wood prints of Utagawa, Hiroshige is not only loved by art favorers but also studied or used by researchers or practitioners of science and technology. However some riddles have been long pointed out. Recently 55 oil paintings of Edo period with signs of Shiba, Kokan were found, 52 of which have many similarities in the composition and representation of the landscapes or the people drawn in them. Most Japanese artistic researchers or critics consider them as counterfeits by later painter(s) tracing Hiroshige's Ukiyoe printings. We minutely studied the reasons asserted by those critics and compared the compositions of corresponding pictures of two artists, and came to the following conclusions upon many evidences. Originality of Kokan's paintings can not be denied. Forgery of Kokan's paintings from Hiroshige's prints is impossible. Reversely, it can be said that Hiroshige referred to and modified Kokan's paintings as his Ukiyoe. According to these premises, such mysteries found in Hiroshige's prints can be clearly unriddled.

【キーワード】 東海道五十三次；歌川広重、版画；司馬江漢、油絵；比較；謎解き

【Key-Words】 Tokaido 53 Station Series; Utagawa Hiroshige Wood Printings; Shiba Kokan Oil Paintings; Comparison;Unriddling

1. 初めに

科学技術分野における専門分野間のディスコミュニケーションの解消にこそ、データベース活用の意義があるのでは、の問題意識から、その方法について検討してきた。これには広く理系・文系の枠すらも越える必要があろう。その中で偶々次のようなテーマに遭遇した。

有名な歌川広重の版画「東海道五十三次」は、その美術的に優れた情景描写や構図で広く世界中に知られ愛されてきたが、園芸（小野）や土木建築（坂井 1-4）の専門家が江戸期の樹木分布や景観を調べる研究に利用したり、計算機画像処理の題材にしたり（小沢 1,2）、浮世絵を患者に見せる心理療法にも利用する（白川）などが、科学技術振興事業団の科学技術文献データベースから明らかになった。しかし理系の研究者は、広重は実際には東海道を歩いてはおらず（鈴木）、何らかの元絵を参考にして浮世絵風にアレンジしたのでは（浅野、稲垣、近藤、徳力）、の美術界の議論や、広重の他の浮世絵には次々と元絵と見られるものが見つかる（大久保）事実には無頓着で、四季の変化を取り入れた広重の優れた演出、と賛美している（小野）。

江漢と広重の年譜

1747	1788	1797	1799	1812	1818	1832	1833	1858
延享 4	天明 8	寛政 9	寛政 11	文化 9	文政元	天保 3	天保 4	安政 5
江漢： 出生	長崎行		近畿行	京都行	没			
広重：		出生				旅行	五十三次	没

（注 1）江漢、長崎行：春-夏、近畿行：4-5 月、京都行：2 月立ち 12 月帰り

（注 2）広重、京都行（言い伝え）：1832（天保 3）年 7-8 月のみ

新発見の油絵は、江戸と京都および 53 宿場の全 55 枚のうち 52 枚までが構図や描写された人物まで広重の版画と偶然とはいえ

ところが 1992 年に岐阜の旧家から、司馬江漢の落款がある 55 枚の油絵が発見された。そのうちの 52 枚は広重の五十三次と偶然の一致とは言えない類似性があり、江漢絵から広重画を描くことは可能だがその逆は先ず不可能であることが論じられている（對中 1）が、美術界は大方これを無視するか、広重を模倣した後世の贋作、と決めつけている。広重の東海道が自然科学・工学の方面でも採り上げられているからには、この問題を放置しておく訳には行かないだろう。しかしこの件は調べるほど微妙に錯綜しており、そこに謎解きの面白さがあるのも事実である。そこで浅学を省みず以下のような調査・論考を行った。

2. 新発見の油絵東海道

2. 1 新発見油絵の特徴

司馬江漢は、1747 年生まれ、1818 年没、生涯、少なくとも 3 度、春夏秋冬にわたり→東海道を旅行したことは記録により確かめられる。一方、広重は 1797 年生まれで江漢より 50 才若く、1858 年に没しているが、「東海道」刊行の 1833（天保 4）年の前年に東海道を旅したと伝えられるその春まで、江戸の定火消しで江戸を離れられず、未だあまり有名ではない絵師であった。

ない類似性を持っているが、詳細に見るとそれぞれが微妙に異なっている。江漢油絵は遠近法や西洋の陰影法を駆使し、写実性

が高く曲線を多用し、立体感がある(横地)。広重の方は平面的ではあるが人物がユーモラスに描かれ親しみやすいのが特徴である。

2. 2 美術界の見解

美術界・美術史家の反対意見は要約すると以下の通りである。

- (1) 画風が江漢のものとは異なる。江漢が描くはずなし(成瀬不二雄氏、2001/01/27の筆者との第1回電話にて)。後世盛んな点描が見える(細野)。
- (2) 印譜(サイン)が違う。司馬峻の「馬」、江漢の「漢」が違う。絵の具に江漢の時代に無い新しいものが使われている(クロムイエロー)(大久保純一氏、2001/01/27の筆者との第1回目の電話にて)。江漢の死後に普及したという白粉「仙女香」の広告が「関」の本陣に見えており、広重の模倣である決定的な証拠である(稲垣。大久保純一氏、2001/01/28の筆者との第2回目の電話にて)。
- (3) 広重の五十三次は世界的に浮世絵の価値基準となっており、元絵の存在が正式に認められると大きな影響がある。

2. 3 双方の方法論の違いについて

美術界の関係者とも接触し議論した際に感じたことは、我々理科系との方法論の違いである。美術界の方法論の特徴を挙げるならば、感性や経験に大きな比重を置き、疑わしきは否定する傾向が強く、他からの参入を嫌い、また美術商界と美術史学が未分離といえる。

この第3の他からの参入を嫌う特徴は昔からではなく、例えば筆者が絵具について調べた「東洋絵具考」の著者、塩田力蔵氏はその序文で「とかくの大革新は、却って

局外の好事家中より起こる例なれば、姑く概論として、自分一個の大局観を略述して置いた」(塩田)、のような立場の専門家もかつては居たことを付記したい。

一方我々自然科学における方法論の特徴は、以下のとおりであろう。

論理実証主義。絵画に適用すれば、素材・現場や時刻の実証。真実はいずれ誰かが明らかにする、の再現可能性、楽観主義。疑わしきは保留し、誤謬により永久に失われる危険を回避する。新しい事態には新しい方法論で。

このような方法論の違いを念頭に置いて、協力可能性を探ることも、研究の動機の一つである。

3. 美術界への反論

3. 1 反論の項目

上記(1)については、あまり触れない。ただ江漢は、日本画(狩野派)、浮世絵(鈴木春信)、漢画(南蘋派)、洋画(エッチングと油絵)を幅広く修得し、これらの様々な絵画を残しており、また常に新しい画風を試みていることは「西洋画談」や佐賀の友人への手紙にも記されている。後年の作である「花鳥図」には点描の手法が見られ、さらに20番の「府中」には、江漢晩年の真筆「駿州柏原富士図」の麓にあると同様の、江漢に極めて特徴的な森林の形が描かれているのである。

(3)は学問とは無縁であり、美術界の内幕に容喙する意図はない。ただ未だ無名の広重が幕府から朝廷への「お馬進献の使節」に抜擢・同行を許されて夏に旅行し、出世作で最も有名な東海道を描き「蒲原」を雪景色としたのは、広重の天才のなせる技、と賛美するのは誉め過ぎであり、素人眼にも納得できない。が先ず(2)の諸点につき我々が調査した結果について述べ、さらに解説書等の論点も取り入れて江漢の絵と

広重の版画の大きな相違点を分析し、江漢の絵によれば従来謎とされてきた再刻版の理由や描いた場所が相当程度明らかになることを紹介する。

3. 2 美術界の見解への反論

(1) 印譜の違い

- ・真筆中にも、また急いで書いた自筆の日記には、似ている「馬」や「漢」がある(成瀬書より)。
- ・なお、印鑑は江漢の真筆「春宮図」のものとは一致(對中2)。

(2) 絵の具、クロムイエローの問題

- ・クロムイエローは、1797年にフランスのヴォークラン(Vauquelin)が新しい金属であるクロムを発見し、顔料史上にエポックを作った(桑原利秀、安藤徳夫)。
- ・クロム：1797年、L.N.VauquelinがSiberia産のベニエン鉱(紅鉛鉱)より未知金属の酸化物として見出だし、この新金属が塩類として各種の色彩を示すことから、ギリシャ語の $\chi\rho\omega\mu\alpha$ (色) にちなんで命名された。(化学大辞典)
- ・ベニエン鉱(紅鉛鉱)：鉛のクロム酸塩鉱物。色にちなんでギリシャ語の $\kappa\rho\omicron\kappa\omicron\sigma$ (saffron) に由来する。産状、産地：二次成鉱物としてリョクエン鉱、ハクエン鉱、モリブデンエン鉱、デクルワゾー石などと共生する。ソビエトUrals地方 Beresov、ブラジル Minas Geraes の Goyabeira、アメリカ California 州 Inyo 郡 Darwin 鉱山。組成、 $Pb(CrO_4)$ 、(中略) 暗トウ赤色、オレンジ色、黄色、条コン：トウ黄色。ダイヤモンド光沢ーガラス光沢。半透明(以下略)。(化学大辞典)
- ・日本では古くから使われていた(成瀬不二雄氏、2001/02/14の筆者との第2回電話にて)。

- ・古くからの天然黄色顔料である紅鉛鉱から新元素クロムが発見されたのが1797年、大量生産が20年後の江漢の没年である1818年(中右)。シカゴのマックローン研究所の鑑定でこれが分析されたとしても、江漢は生前に試作品を長崎経由で入手できた可能性があるし、輸入のベルリン青の使用は確認されている(成瀬 p372)。輸入の天然品を自分で工夫調合した可能性もあり、使用してあっても否定材料にはならない。

(3) 白粉「仙女香」の小さな広告札

寛政期(1789-1801)の歌舞伎名女形3代目瀬川菊之丞の俳名、**仙女**にちなんで(高橋、花咲)、江戸の坂本氏が1807(文化4)年頃から売り出した白粉(江戸博、歌舞伎人名事典)。江漢が東海道を旅行した1812(文化9)年頃に本陣に、上流階級向けの広告札があっても矛盾しない。1819(文政2)年に出版許可申請され、1825(文政8)年に出版された「江戸買物独案内」で仙女香が確認できる(花咲)からとって、それ以前には存在しないということにはならないし、浮世絵で「仙女香」それ自体が広告として大きく描かれた後期のものとはあくまで扱いが異なるのである。

4. 構図からの江漢絵が先である決定的な証拠

01番「日本橋」初版では人物が少ないが、再版で江漢絵からインドネシア人等を追加してにぎやかにした。

逆の、再版の人物から魚屋を除いて贗作者が江漢絵を描いたの説(稲垣)には無理がある。インドネシア人の出所や魚屋を除く理由が不明。

03番「川崎」初版の不自然な船頭の頭の向きや富士の見え方を再版で江漢に合わせ

て小修正。広重オリジナルならこんな修正は敢えてしない。

04番「神奈川」再版では屋根の形を江漢に合わせ、また広重の時点では進捗していた埋め立ての様子を実景に合わせて追加した。もし逆に江漢絵が後世の贋作というなら、贋作者はなぜ日本橋や川崎では再版を真似し、神奈川や後述の小田原では实景に近い再版ではなく初版を真似たのか、説明が必要。

07番「藤沢」の遊行寺は、1831（天保2）年12月27日に焼失し、再建は5年後（大島、藤沢市史）なので、広重は翌年の夏にも、五十三次刊行の前後にも見ることはできなかった。広重が江漢絵を真似た決定的な証拠の一つ。また江漢は構図の関係で寺を高い位置に描いた（江漢には他にもこの種の変更の事例がある）が、広重はこれを理解せず、実在しない階段を描き足してしまった。逆に江漢は実在の寺門を小さく描いているが、広重は見落としている。これも広重画から江漢絵を真似たのではない、決定的な証拠の一つである。

10番「小田原」初版では江漢が描いた相模川と背景の大山を真似たが、箱根の山と酒匂川が小田原により近くふさわしいとの指摘を受けて实景に従い再刻しなおした。しかし江漢は大山の麓にはあるはずのない城は描いていないのに、広重はいずれも城を描き加えている。ただし位置が異なり、小田原城はもっと左の海寄りのはず。

11番「箱根」芦ノ湖の湖岸、駒ヶ岳の位置から、江漢が誇張して描いた「塔ヶ島」が分かる。

12番「三島」三島神社の鳥居と灯籠の位置関係は江漢絵が正しく、また西方にある満月から早朝と分かる。

13番「沼津」東海道沿いの狩野川ではなく、支流の黄瀬川と分かり、満月の方向から早朝と判明。ここの描写手法の点描は、

江漢真筆の「花鳥図」にもある。

16番「蒲原」は雪景色であるが、夏に旅をした広重がこれを見事な冬の風景に描けるであろうか。江漢なら冬季にも東海道を歩いているので可能である。

17番「由井」富士の右側は広重のような水平線はなく、愛鷹山や伊豆半島が見えるはず。広重は実見していないので、江漢絵の右先の部分を海にってしまった。

32番「荒井」の双胴船を、広重には意味不明であったのか、ムシロで隠した。広重画から江漢絵を正しく描くのは先ず不可能（対中1）。

5. 江漢絵の構図や描き方の巧みさ、立体感、特徴

12番「三島」、13番「沼津」の陰影法。

15番「吉原」、44番「四日市」の巧みに曲線を用いた構図。

08番「平塚」、09番「大磯」、22番「岡部」、26番「日坂」などの立体感。

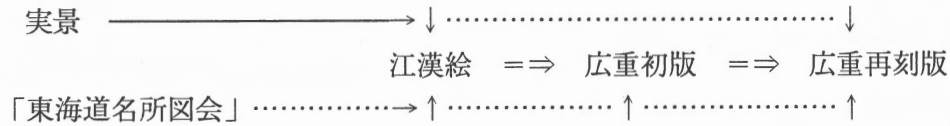
20番「府中」の山麓に江漢独特な森林の描写。

6. 状況証拠

- (1) 1977（寛政11）年刊行の「西洋画談」末尾に「春波楼画譜」を刊行し、西洋画法を解説する予定、との記述。
 - 一、春波楼画譜 西洋画伝、和蘭奇工、天文地理の部分をして、観る者をして煩わしからざらしむ 近刻 とあり、「規矩術（定規とコンパス）を以て日本の山水遠近の法を描く」画法を解説する予定であった（未完、成瀬書より）。
- (2) 佐賀藩士、山領主馬宛の1813（文化10）年6月12日付け書簡に
 - 一、此度和蘭奇巧の書を京都三条通富の小路西の入、吉田新兵衛板元にて出来申候。其中へ日本勝景色富士皆蘭法の写真の法にて描申候（中野書より）。

7. 江漢絵の不思議な点と広重画との関係

全体の想定される関係



- (1) 東海道名所図会（1797年刊行）にも同様の構図の絵がある。江漢も広重も江戸から遠い場所については、名所図会を参照した。
- (2) 広重も後には小田原あたりまでは实景を確認に出かけ、修正もしている。
- (3) 縦に長く誇張された構図（藤沢、戸塚、関）、实景の誇張や移動は江漢によくある。

8. 広重画の問題点

- (1) 季節の多様さは、想像のみで描けるか。
- (2) 实景とのズレや矛盾、さまざまな再版の存在を説明しきれるか。
- (3) 他の浮世絵には次々と見つかる元絵があるが、東海道は例外で、オリジナルと主張し続けられるか。

9. 文化人・科学者江漢の謎と魅力

- ・天文学を研究、地動説を紹介（成瀬）。
- ・広い人脈 —— 老中、松平定信、仙台・紀州・岡山・佐賀藩主、平賀源内（芳賀）。
- ・通常会えない人物とも会見 —— 間宮林蔵、大黒屋光太夫（芳賀）。

10. 結論

- (1) 江漢油絵は広重版画の元絵と考えると矛盾しない。逆に江漢油絵を前提に

すればこれまでの広重版画のさまざまな疑問や二大傑作「蒲原」「庄野」の謎も無理なく説明できる。

- (2) 広重の版画から全ての江漢油絵を贋作することは不可能。
- (3) 常識的に考えても、版画から实景に近い高度な油絵多数を贋作するのは不自然。

11. コメント

- (1) 広重の名アレンジャーとしての力量は依然として高く評価される。
- (2) 江漢の広重への影響は美術界で既に認識されつつある（成瀬 p378）。
- (3) 問題の先送りは理系にも影響を及ぼし、美術界の姿勢が問われよう。
- (4) 江漢作と見られる油絵は日本の重要な文化遺産として大切にすべきではないか。

12. データベース構築について

- (1) 自然科学—人文科学の多方面の協力が望ましい。
- (2) データベースとは本来、周辺領域・関連情報を探すためのもの。そのための総合的なあるいは特に関連性を考慮したデータベースの構築も必要。分類やキーワードの調整、相互乗り入れ。共同研究、相互協力。

13.謝辞

本発表に際し、江漢絵の計算機コピーを快諾された對中如雲氏に感謝します。江漢真筆の絵は、集英社、日本美術絵画全集

25「司馬江漢」、学習研究社、「日本絵画の黎明・25」から借用した。広重版画は對中氏の著書等から転載した。

14. 参照図書・文献

- 浅野秀剛 浮世絵を読む・5 広重、朝日新聞社、1998
穴吹史士 名画日本史、朝日新聞社、2000, 2001
稲垣進一 広重・東海道五十三次-成立とその謎、河出書房新社、2000
江戸博 江戸東京博物館パンフレット、今月の見どころ、1998, 2月号、No.8
大久保純一 浮世絵を読む・5 広重、朝日新聞社、1998
大島洋一 江漢図の風景と人物、藝術倶楽部、Vol.20, p8-11, 1997
岡村千曳 紅毛文化史、創元社、1953
小沢一雅 1 浮世絵合成システム P I C S の構成、情報処理学会研究報告、93,105, p45-52,1993
小沢一雅 2 絵画生成のモデル化に関する一考察、情報処理学会論文誌、37,3,p.355-362,1966
小野良平 広重・五十三次に見るみどころ演出法、造園雑誌、52,5, p241-246, 1989
化学大辞典 共立出版、1993 (第34刷)
歌舞伎人名事典 野島寿三郎 編、日外アソシエーツ、1988
桑原利秀、安藤徳夫、顔料及び絵具、共立全書、1972
近藤市太郎 世界名画全集、広重と東海道、本文と別冊、平凡社、1960
坂井猛 1 広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究、日本建築学会計画系論文集、461号、p165-174, 1994
坂井猛 2 広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察、日本建築学会計画系論文集、482号、p155-163, 1996
坂井猛 3 広重の浮世絵風景画にみる樹木の構図的機能に関する考察、日本建築学会計画系論文集、507号、p165-171, 1998
坂井猛 4 浮世絵風景画に描かれた宿場の景観構成に関する考察、日本建築学会計画系論文集、509号、p149-156, 1998
塩田力蔵 東洋絵具考 アトリエ社、1942
白川佳代子 母子浮世絵にみる「甘え」心身症の新しい視点、日本小児医学会報、No.17, p99-103, 1999
鈴木重三 広重、日本経済新聞社、1970
對中如雲 1 広重「東海道五十三次」の秘密、祥伝社、1995
對中如雲 2 司馬江漢「東海道五十参次」は真筆、藝術倶楽部、Vol.11, p20-24, 1995
高橋雅夫 化粧ものがたり、雄山閣、1997
徳力富吉郎 東海道-昔と今、第2版、保育社、1972

- 中野好夫 司馬江漢考、新潮社、1986
- 中右瑛 「江漢・東海道五十参次」の怪、藝術倶楽部、Vol.20、p15-18、1997
- 成瀬不二雄 司馬江漢－生涯と画業、本文編、作品編、八坂書房、1995
- 芳賀徹 日本の名著 22、中央公論社、1971
- 花咲一男 坂本氏・仙女香図説、化粧文化、ポーラ化粧品、1981、6月
- 藤沢市史 ふじさわわがまちのあゆみ、藤沢市
- 細野正信 1 司馬江漢、江戸洋風画の悲劇的先駆者、読売選書、1974
- 細野正信 2 対談、司馬江漢の「東海道五十参次」、藝術倶楽部、Vol.6. p3-5, 1995
- 堀晃明 広重の東海道五十三次旅景色、人文社、1997
- 横地清 遠近法で見る浮世絵、三省堂、1995

01 日本橋

江漢



広重初版

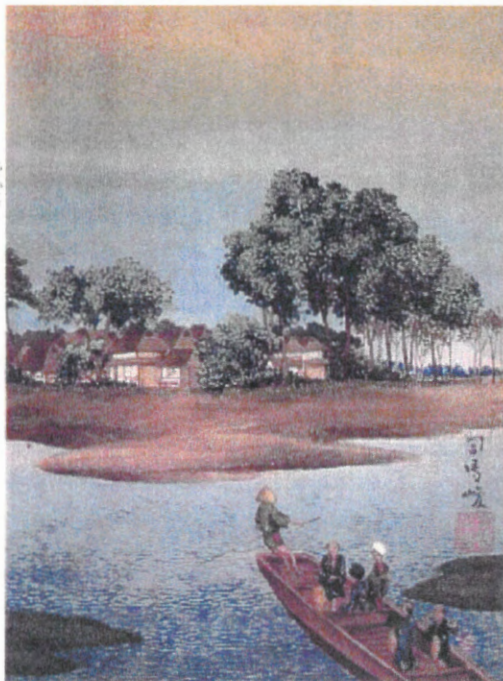


広重再版



03 川崎

江漢



広重初版



広重再版



04 神奈川

江漢



広重初版



広重再版



07 藤沢

江漢



広重



広重には実在しない石段、
遊行寺は天保2年に焼失

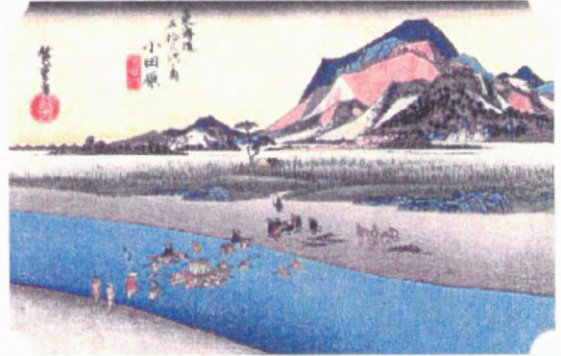
江漢には実在の黒門が鳥居左
柱中央に見える

10 小田原

江漢、大山と相模川



広重初版



広重再版



酒匂川と箱根山



12 三島

江漢



広重



鳥居と灯籠の位置関係は江漢が正しい

13 沼津

点描手法の使用例

江漢



江漢・花鳥図



16 蒲原

江漢



広重



広重の最高傑作の一つ

冬にも旅した江漢、夏に旅の広重

17 由井

江漢



広重



実際は右に水平線はない

20 府中

江漢



参考、江漢、駿州柏原富士図



江漢独自の山麓の森林の形が酷似

22 岡部

江漢、立体感、写実性



広重



江漢、緩い奥行きのある坂

26 日坂



広重、急坂



32 荒井

江漢、双胴船



広重



ムシロで隠す

江漢

36 御油



広重



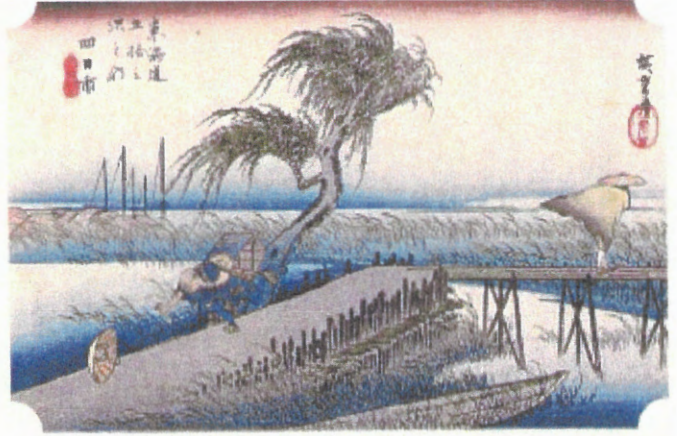
よりユーモラスだ

44 四日市

江漢、曲線の多用



広重、直線使用



46 庄野

江漢



広重



広重の最高傑作の一つ

48 関

江漢



広重



屋内に小さな仙女香の札
江漢の時代に既に存在

52 石部

江漢



広重



東海道名所図会

